

セルフメディケーションの時代

日本の100歳以上の人口が、昨年の9月時点で、2万8395人に達したということです。平成17年より2841人増えたそうです。女性が2万4245人で85%、男性が4150人となっています。昭和56年には1000人だったそうですから、わずか35年で28倍、今年は3万人を突破するのがほぼ確実だということです。人口10万人あたりでは、100歳以上の高齢者の割合は22.23人(昨年20.01人)。平均寿命も、男性が79歳、女性が86歳、そして人口の20%は95歳以上生きるというのですから、本当に日本人は長生きになったものです。

2007年問題などについて、昭和22年から24、5年頃までのいわゆる団塊の世代が、今年から次々に還暦を迎え、定年、そして年金世代に入ってゆくことが話題となっていますが、このような長寿時代ですから、法律的にも定年が60歳から順次65歳まで延長してゆくこととなっていますので、2007年問題も5年ほど先送りされたといってもいいようです。

しかし、このような長寿時代、このままでは高齢者の医療費は増え、健保財政が大変なことになる、国民皆保険体制が壊れてしまうと、政府は今、医療費の抑制対策におおわらわです。健康診断や国民への保健指導を強化して、糖尿病などの生活習慣病の予防対策を強化するとしています。厚労省のデータでは、介護が必要な高齢者は現在300万人、そのうち認知症の老人は150万人ですが、20年もすると要介護者数は500万人となり、そのうち認知症の高齢者は250万人にも増えると予測しています。ですから、国民の方も、せっかく長生するなら、寝たきりや認知症にならないよう、そして余り医者のお世話にならないよう、健康で長寿を楽しみたい、というので健康意識が大変高まっています。先日行われた第1回東京マラソンでは9万人の応募者があったそうですが、国民の健康意識の高まりの証左でしょう。また、健康食品のマーケットは、3兆円とも4兆円とも言われています。

医薬品業界でも、そのような国民の健康意識の高まりを背景に、「セルフメディケーション」という言葉が、今、キーワードになっています。セルフは「自分」、メディケーションは「治療」という意味ですから、「自己治療」、つまり、軽い病気は、病院にかかるより、早いうちに自分で手当てしよう、という考え方です。このセルフメディケーションに応えられるような、もっと効き目のよい市販薬を開発してゆこうという機運が、医薬品業界に高まっているわけです。

実は、以前は、市販薬は、「医療用医薬品」(病院、診療所や処方せんで薬局で作ってもらう医薬品)と、市場を半分づつ分け合っていました。しかし、国保や健保制度が普及するにしたがって、市販薬の市場は10%にも満たない比率になってしまっていました。しかし、ここに来て、政府の医療費抑制策が進むにつれ、市販薬復活の機運が出てきたわけです。

「セルフメディケーション」が盛んだったのは、庶民のためのまともな医療施設のなかった、江戸時代のようなようです。病気になっても一般庶民には病院も診療所もない。そんな時代、「生薬屋(きぐすりや)」という、街中で常時開いている本格的な薬店が登場したわけです。東京の日本橋本町、大阪の道修町などは今でも医薬品関係の会社が多く集まっていることで有名ですが、例えば、日本橋本町に薬店が開かれたのは、徳川家康がようやく天下人としての力を備えて来た、天正18年(1590年)だそうです。当時、江戸の町では眼病が流行っており、そこに目をつけて「眼薬五霊香」という目薬を売り出し、売れ行き上々、大いに繁盛したそうです。その後、日本橋本町には薬店が増えてゆき、幕府も本町を薬種商の町として指定、薬の品質、真贋などを監督させたということです。

病院、診療所など医療体制が完備された今、高齢化という時代の中で、再び、セルフメディケーション

の機運が高まり、市販薬が再び元気を出そうとしているわけですが、歴史は繰り返してゆくものなので
ね。